

の竹の外交論は本当に主体性のない見方（歴史観）に基づくのかという疑問があるからである。

言い換えれば、竹の外交論の歴史観の批判的考察が本書の主題であれば、議論の進め方としては、まず、各時代のタイ外交についての「竹の外交論の歴史観」による分析には外交アクターへの注目が少ないことを先行研究によって示し、つぎに、主体性を回復した著者の歴史観によって、各時代の外交アクターが重要な役割を果たしたことを立証すれば、竹の外交論の歴史観批判は説得性を増すのではないか。しかし、各章において、著者のいう竹の外交論に基づく各時代の詳細な先行研究の考察はなく「通説」の記述で終わっているために、いかなる先行研究が著者のいう各時代における主体性のない竹の外交論を展開しているのかが、必ずしも明確ではない。その結果、竹の外交論には主体性がないという主張の妥当性に確証を持ってないため、竹の外交論からの脱却という本書の主張の説得性は必ずしも十分とはいえないのではない。その理由は、アクター分析の重要性を竹の外交論への批判という手続きによって主張する議論の構成にあるのかもしれない。

本書はこのような方法的課題はあるにせよ、タイ国内の諸アクターの対外意識に注目した国内政治と対外政策の関係についての詳細な分析や小国意識についての議論の学術的意義は高く、タイの外交や政治、東南アジア、国際関係を学ぶ者にとつては必読の書である。

（高橋正樹・武蔵野大学名誉教授）

参考文献

Kislenko, Arne. 2002. Bending with the Wind: The Continuity and Flexibility of Thai Foreign Policy. *International Journal* 57(4): 537-561.

井上 航.『音を帯びる——カンボジア北東部クルンの「参与」の民族誌』春風社, 2025, 277+vp.

音を「帯びる」。

これが、カンボジア北東部クルンの村でのフィー

ルドワークを踏まえた、音の民族誌である本書の趣旨が要約された一語である。

本書は、これまで、断片的な記述のみであった東南アジアにおける山地少数民族の音楽研究に新たな知見を加えるとともに、音を前面に立てる研究に対しても新たな地平を切り開こうとするものである。近年、「環境の知覚がどのようにして人間の音響的表現と結びついているか」[山田 1991]という視座が示され、音というものに耳を澄ますことで時間・空間・場所・環境を身近なものにし、生活世界の一片を理解しようとする民族音楽学のあり方が展望されてきた。そのなかで、本書は更に、先行研究にみられなかった束の間の一回性の経験を記述の前面に押し出す姿勢を重視している。これは、グローバル化などで「文化」の境界が曖昧になり、総体としての「文化」より、個の身体への注目、一回きりの経験を重視する近年の民族誌的学問の傾向ともかかわる。本書は、鳴り響いている束の間の一回的な経験という音の本質を重視する。そして、音とともにどのような楽しさや気分が束の間味わわれているかに注目し、そうした「もろもろの束の間の感じ味わいの質を帯びる」(p. 27) ことが「音を帯びる」ことだという。

著者は、村人の「日常の活動との連続性において、音の響きのなかで時を過ごすというのはどのようなあり方なのか」(p. 18) という点に注目する。そして、フィールドワークでは、人々と生活とともにし、人々の中に流れる時間やリズムを共有することに重点を置いた。「参与観察」の「参与」は、参加の行為を問題とする「参加」ではなく、「出来事に参加しようと近づいていったらおのずとある感じにとらえられてしまった」(p. 249) ことであり、著者はとらえる。ここに、「帯びる」という概念の重要さがある。フィールドワークでは、身近な音に村人とともに接し、かれらが音を「帯びる」ことで経験する生のリズムや雰囲気や気分のなかに研究者自身が身体を浸すことをとおして、何を感じられ、何が理解できるかを問う作業が中心となった。

以上のような著者の研究のスタンスを示した序章に続き、第1章では対象地域とクルンの人々の概観、そして著者がどのように人々の生活に巻き

込まれながら音に出会っていったのかという、調査への過程が記される。

これらを踏まえ、以下、具体的な内容を扱った第2章以降を紹介することにしたい。そこでは、生活に鳴り響く音のなかでも、特に竹の音と、ゴングの音に注目して論がすすめられる。

第2章と第3章は、日常生活の中にもみられる竹の音に焦点があてられ、第4章から第6章は、精霊とかかわる非日常的な儀礼空間におけるゴングに焦点があてられる。

第2章「気まぐれに音と戯れる——竹筒遊びのフィジカルな様態」では、クルンの人々の竹筒の両側で手を打ちそのリズムカルさを楽しむ音遊び「ブング・ブ」に焦点があてられる。ここでは、著者は、気まぐれに手にとられた竹筒が音遊びの道具になるという、「ブング・ブ」の特性をとりあげる。そして、村人が竹を手を取る前に行った儀礼の準備作業にみられた力動感が、竹筒を手にしたときまで持続するという作業と音遊びとの連続性にまず注目する。この力動感は、喜怒哀楽などのカテゴリー性の感情にあてはまらない、生命活動において必然的に湧いてくるものとされる。そして、本来必要とされる打のタイミングの繊細さと直前までの作業がもたらした「強張り」をともなった力動感の「ずれ」が、可笑しさと同時に楽しさを参加者のあいだに生み出したことが示される。ここから、個々の身体が予定された全体的な動きの流れからの時間的・空間的ずれを生み出すことを肯定し、それを楽しむ姿勢が見出される。

第3章「竹というものを味わう——竹筒遊びのマテリアルな様態」では、この竹を相手に気まぐれに生じる音遊びの場面で、竹のマテリアルな側面がいかに人を引き付けるかを分析することに視点が向けられる。畑という場所、収穫の儀礼の性格など竹筒遊びをはじめ竹とかかわる行為がなされる場の様態を踏まえ、参加者が協調的に一つの儀礼というイベントをつくり上げようとする姿勢と、楽しさを分かち合おうとする姿勢に注目する。儀礼のために竹を伐る、などの作業に伴う動きのリズム、切る際に生じる音など竹が出す多くの音、こうした竹と関わる村人の参与の様態が、竹の音を楽しむという「ブング・ブ」の発生へとつながっ

た可能性を示唆した。そこでは、身体に深く吸収され、かつ身体から発散される音が、環境を親密にする手立てとなる〔フェルド2000〕。著者によると、気まぐれに発生する「ブング・ブ」は、身近な竹を媒介にすることで、人々が自らの住む世界を親密なものにしていくという意味をもつものである。

第4章以下は、森の日常生活に密接にかかわる精霊が、音の営みにどのように関連しているかに注目される。特に儀礼におけるゴングの音に注目して記述が行われる。

第4章「状況に生成する精霊、声とともに動く精霊」では、まず「精霊」とは何かが説明される。精霊は、物的対象に心的な何かが宿るといった心身二元論で説明できるものではない。霊的なものは「音の気配」で感じられていることを示唆するように擬音語で表わされ、雨粒が木にあたるといった動物的かつ持続的状況が雨季特有の精霊を生むというように、「動きの形」を示す状況が精霊として表象される。祈禱句においても、ほとぼしするような韻律などから精霊の「動きの形」がうかがわれる、と述べる。

続く第5章「供儀とゴング——精霊とともに楽しさを味わう」では、畑の精霊アラクの怒りを原因とする病癒しのために行われる牛／水牛供儀におけるゴング合奏の位置づけが示される。儀礼では、牛／水牛の肉とゴングの音がかかせないが、それらは楽しいものでなくてはいけない。ゴング演奏は、常に「いま」を楽しい気分で過ごそうとする参加者たちにとって、おのずと楽しいと思える時が醸成されてはじめてなされる。屠殺された牛／水牛の肉はミンチ状にされ平等に分配されるが、そのために肉を叩く盛大な音が生じる。それがまた食の楽しみをかきたてる。このゴングの音と肉を叩く音が供儀イベントを特徴づける音であり、実質的な楽しみを支え、人と精霊がともに楽しむという目的が成就するのだ、と著者は述べる。

第6章「ムアンさんの牛供儀——場所から立ちのぼるもの」は、一人の村人のケースをとりあげる。供儀は、主催者の病を癒すために、精霊アラクの怒りを鎮める目的で行われた。アラクの怒りは当事者の不吉な気分として感じられるもので、

これを変えることこそ供犠の意義である。そこでは、何でもなかったところが一つの場所になること（場所化）と、居合わせた人々がそのような場所を帯びる身体になること（身体化）の二つが、一つのこととして経験される、と著者はいう。供犠の際には、供犠柱に牛をつなぐことで場所が生じ、供犠柱を回り歩くゴング演奏が精霊アラクへの願いとしてそこに立ちのぼる。屠殺後の牛の肉が大勢の人の手で叩き刻まれる音と、人々の熱気は、一つの気分となって立ちのぼり、作業場となったベンチ兼テーブルが一つの場所になる。場所が移り、精霊への願いは、ゴングの音やものを叩く音を楽しむ人々の熱気によってかわられる。再び始まる供犠柱を回るゴング演奏は、改めて供犠柱を精霊への願いの場所となし、演奏者は昼間までの「楽しさ」を引きずりつつ、酒と肉を口でうけとることで、精霊を帯びる。そして、人と精霊が演奏者の身体をとおして共に楽しむという儀礼の目的が成就する。精霊は満足し、怒りを含んだ不吉な気分は、楽しい気分に置き換えられる。

本書は、著者がフィールドで様々な味わった「音を帯びつつ感じる経験」の意味について考えることを目的としている。従って、「ややぼんやりした気まぐれさや、気分のレベルの束の間の音の経験に注目し、その経験に言葉を与える」（p.256）ことに注意がむけられている。キーワードとして、「楽しさ」「気分」があげられているが、著者は、この感覚的ともいえる言葉でしか表せないものの重要性を、できる限り伝えようと努力している。そのために、クルンの生活や儀礼の場を臨場感のある描写で紹介するとともに、哲学上の議論を援用するなど、本書の記述には感覚的なものを学問的に扱う上での苦勞がみられる。同時に、「言語的には記述しにくい視覚的・聴覚的様態を把握してもらう」（p.40）ための画像視聴用のQRコードをつけるなど、言葉による説明の限界を補う手段についても配慮がされている。「対象を明晰に捉えて厳密に分析しようとする学問の姿勢からこぼれおちてしまう経験の側面」（p.76）を、学問の対象として扱おうとする本書は、限界を意識しつつも挑戦的な作品といえよう。

しかしながら、評者は、以下のような点につい

て、更に問うてみたいと考える。

著者は、「おのずとある感じにとらえられてしまった」体験を重視し、「帯びる」という言葉を選択している。著者が述べる「参与」とは、単なる「参加」ではない。しかしながら、ビデオを回すなど、調査中には客観的な観察の立ち位置にも回らざるを得ないと思われる場面がある。「楽しさ」は規範的な感情ともいえる重要なキーワードであるが、著者自身の「楽しさ」は、フィールドの人々の「楽しさ」とどう接合されているのだろうか？ また、この研究が、「参与によって日常の感性の『いくばくか』を共有することができるのではないか」という目論見に支えられている」（p.37）と著者は述べるが、共有できなかったものがあるとすれば、それはなんであろうか？

また、第6章での「場所化」と「身体化」は、ゴング演奏を伴う供犠儀礼を学問の組上にのせる試みとしての理論化の一つの焦点である。しかし、「気分」に関しては、関連する理論的説明を援用しつつも、「気分」そのものを理論づけることは今後の課題としている。これは、理論づけることでこぼれ落ちるものこそが重要であるとする、著者の姿勢が伴うとまどいのようにも思える。

本書では、特に竹とゴングに焦点があてられる。より日常的で楽器にもなる竹の音は、日常生活の音であり、ゴングは、精霊との良好な関係を保つ目的をもつ非日常的な儀礼の音である。全体の軸となっているこの二つの音の対比が何を意味するのかを、より明示的な言葉で説明する箇所があったら、なおよいように思われる。

また、本文中には、調査者の社会への批判（反省）とも思われる言葉がかいまみられる。例えば、調査者である著者が属する社会の日常には、クルン社会にはみられない「義務だから機械のように身体の動きをさせる」（p.185）行為がみられ、それは、「時間を管理し計画を立てて自らを従わせる学校教育」（p.185）と関連があった、と著者はいう。要するに、著者は、この民族誌を通じて現代社会に何か伝えたいものがあるようにも思われるが、その点は明示的には書かれていない。

本書では、一つの民族の文化から個人の体験へと、研究者の分析と記述がシフトしてきたという

学問の動向をふまえ、個々人が体験する音を聴く、奏でるという一過性の時間に着目した、と著者はいう。しかしここに描かれるクルン社会は、変化しつつあるとはいえ、肉を平等にわけるとコミュニティのつながりが固く、精霊に対する観念や、楽しむことなどの価値観もおおむね共有されていた。著者が着目したのは、そういう社会の中での一過性に移ろい行く音である。著者は、近年の民族誌的学問は、グローバル化などによる近年の社会や生活様式の変化を背景として個人に着目するようになったという。しかし、そうした動向を踏まえて執筆されたという本書の事例は、それとは異なる。

さらに、第1章の村の概要の部分に、新たなメディアの侵入によって調査地ではポップスも聞かれているとある。そのような新しいものを含む日常の音に対して、世代間による感じ方の違いは生じていないかなど、変化の様態に関しても知りたところである。

評者は、タイ北部の山地民ルワの竹の音具「ピ」について発表したことがある〔馬場 2014〕。「ピ」は、陸稲の豊作を祈って稲魂をもてなすために音を出す道具であり、旋律があるが楽曲の演奏が目的ではなく、明確に「楽器」とカテゴライズしにくい存在である。それだけに、本書のようなカテゴリーに位置づけられないものへのアプローチ、著者のいう「対象を明晰に捉えて厳密に分析しようとする学問の姿勢からこぼれ落ちるもの」への注目、非常に共感できるものであった。

評者はかつて、大分のカテリーナ古楽器研究所を学生たちと訪れ竹楽器づくりの実習を行ったことがある。本書を読み終えたとき、その際に所長の松本公博氏が語った、竹林での伐採の際に、「『切ってくれ』と呼びかける竹がある。そうした声を手掛かりに切る」ということばを思い出した。そこには、音や気配といったものへの気遣いという本書の著者の関心との共通性がある。その実習の際、学生たちは、竹を自由に切ることで新たな竹楽器をその場でつくりあげた。その経験と、本文中の「ブング・ブ」についての指摘にあったクルンの子どもたちが偶然竹を叩いて遊ぶ時に感じていたであろうここちよい音とのあいだには、音

と音楽、竹という物質、偶然性、気分などといった共通のテーマがあると思われる。本書がとりあげて追求した日常的な音に関する探求は、音に耳を傾け自然素材と触れることで、自然との関わりの中で身体性を見直すことや、効率性追求とは異なる、創造性を生む偶然性への注目などにつながる。これらは、我々の社会の中でもその気になれば見いだせる、重要な視点である。

(馬場雄司・京都大学東南アジア地域研究研究所
連携教授)

参考文献

- 馬場雄司. 2014. 「農具と楽器のはざまで」『もの
とくらしの植物誌——東南アジア大陸部から』
落合雪野・白川千尋 (編), 207-229 ページ所
収. 京都: 臨川書店.
- フェルド, スティーブン. 2000. 「音響認識論と音
世界の人類学——パプアニューギニア・ボサ
ビの森から」山田陽一 (訳). 『自然の音・文
化の音——環境との響きあい』講座 人間と環
境 11. 山田陽一 (編), 26-63 ページ所収. 京
都: 昭和堂.
- 山田陽一. 1991. 「音と生態の認識論——パプア
ニューギニアの熱帯雨林から」『民族音楽叢書
7 環境と音楽』藤井知昭・山田陽一 (編),
15-45 ページ所収. 東京: 東京書籍.
- 押川典昭. 『プラムディヤ・アナンタ・
トゥールとその時代』上巻・下巻. めこん,
2025, (上) 551p. (下) 620p.

プラムディヤ・アナンタ・トゥール (1925-2006)
はインドネシアを代表する国民的文学者であり、
20世紀のアジア文学を語るうえで欠かせない作家
である。植民地時代末期のジャワを舞台にした
「ブル島四部作」(『人間の大地』『すべての民族の
子』『足跡』『ガラスの家』)は数十カ国語に翻訳さ
れ、世界文学の重要な作品として読み継がれてき
た。インドネシアからノーベル文学賞受賞者が出
るならプラムディヤだとしばしば言われてきた。
小説のみならず、戯曲、評論、評伝、翻訳、メモ